

アリサは自信家だ。

自分の行動、言動の正しさを、アリサは常に信じている。

それは決して根拠の無い思い上がりなどではなく、それまでの知識と経験、とくに数え切れないほど繰り返しきた失敗と成功が、アリサの決断を支えていた。

友人たちのリーダーシップをとっている、という自負もある。

リーダーは、迷ったりうろたえたりする姿を見せてはいけない。それは、周囲を不安にさせる。

幼い頃からたたき込まれてきた帝王学の中で、アリサはそれをいやというほど思い知らされてきた。

いついかなるときも、胸をはって、堂々と。

それがアリサの信条だった。

ただ、一つだけ。

そんなアリサでも、未だにただ一つだけ、自信を持ってないことがある。

月村すずか。

アリサと特に仲の良い四人の友人たちの中でも、最も多くの時間を共に過ごしてきた相手であり、アリサのことを誰よりも強く想っている、アリサ自身が自覚している少女。

ふわふわと、どこかつかみどころのない、でも絶対に手を離してはいけない。

そんな想いを心の底にしまいながら、今日もアリサはすずかのことを考えていた。

——最近、すずかの様子がおかしい。

ぱつと見には普段となにも変わらない、だがこの数週間、その会話の端々や、ちよつとした仕草の中に、アリサは大きな違和感を覚えていた。

そう、たしかあれば、すずかが図書館で借りてきたという一冊の本を、楽しそうに紹介してくれたときからだ。

「アリサちゃん、私、最近これにはまってるんだ」

いつもの柔らかな笑みを浮かべながら、すずかがアリサに差し出したのは、通常のものよりはやや薄めの文庫本。

その表紙では、今にも下着が見えてしまうのではないかというほどに短いスカートをはいて、胸元が過剰に大きく開いた服を着た中学生くらいの子が、気の強そうな瞳でこちらを見ていた。

そういうえば、とアリサは思い出す。

何度か、大きな書店のコミックコーナーのそばで、似たようなデザインの本を見かけたことがあった。

たしかこれは。

「ライトノベル、っていうジャンルなんだけど、これが、すごく読みやすくて面白いんだよ」

そう言って笑うすずかの目の奥に、かすかにいつもとは

違う彩が灯っていたのを見逃したことを、アリサは後々まで悔やむことになる。

「いや、別にいつもとかわからんと思うけどなあ」

はやてがあごに手をあてて考え込む仕草をする。

「だいたい、すずかちゃんの様子がおかしいとして、アリサちゃんより先に私がそれに気がつくのは無理ってもんやで?」

「どういうことよ」

「すずかちゃんのことなら、アリサちゃんが一番よく知ってるやろ? それこそ身体の隅々までつて痛っ!」

はやてが言い終わるより早く、アリサの手がはやての頭をはたく。

「おっさんじゃあるまいし、なんてこと言ってるのよ」

「いまさら何言うかなあ。すずかちゃんとは、何度も一夜を共にしてるやろ?」

「してるわよ。ついでに言うとなのはやフェイト、それにはやてともね」

「アリサちゃんモテモテやな。うらやましいなあ」

「なんなら変わる? いいわよあたしはいつでも」

「わ、私がアリサちゃん家の娘に!? いやーそれはちよつと敷居が高いな」

「それだとはやてがあたしの娘になるみたいじゃない」

「アリサママー!」

「調子にのるなっ!」

もう一発。叩かれたはやてが、頭を抑えながらうらめしそうな目でアリサを見る。

「まあ冗談はさておいて、少なくとも私からはいつもと変わらんように見えるで? アリサちゃんの気にしすぎとちゃう?」

「ならいいんだけど……」

はやての言うとおり、気にしすぎならそれでいい。実際、すずかからも「アリサちゃんは過保護だよ」と言われる程度には、すずかのことを気にかけているという自覚はアリサにもあった。

「どうしても気になるなら、なのはちゃんやフェイトちゃんにも聞いてみるといいんちゃうかな。あの二人ならすずかちゃんのことよく見てるやろうし」

「そうねえ、そうしてみるか」

ありがとね、と手を振って、アリサははやてと別れた。

「ん……」

教室へ戻る道すがら、改めてすずかの様子を思い出してみる。

たしかに、はやての言うとおり、少なくとも傍目には、すずかはいつもと変わりなかった。

なにか突飛な行動をとるわけでもなければ、突然おかし

なことを言い出すわけでもない。

だが。

たしかに目立っておかしな行動をとるわけではないが、どこか普段より、動きの一つ一つが大げさな気がする。

話し方も、いつものすずかと比べて、なんとなく回りくどいというか、まるで劇の役者のような言い回しをするところがある。

よく注意していないと気付かないかもしれないそれらの細かな違和感が、アリサにはどうにも引っかかって仕方がなかった。

とはいうものの、それを他人に気付けというのはたしかに難しいかもしれない、とはアリサ自身も思っていた。それは本当にほんの些細な感覚の差で、日頃からよっぽどすずかと親しく接している人間でもない限り、意識することは無い気がする。

少なくとも普通のクラスメイト程度では、普段通りのすずかにしか見えないだろう。

「じ、すると」

ふむ、とうなずいて教室のドアを開ける。

「あ、アリサ」

その音に気付いて顔を上げたフェイトが、アリサに小さく手を振った。

「……なにしているの」

フェイトは椅子に、半分寝そべるような不自然な体勢で座っていた。

その左腕はすぐ後ろの机の上に置かれ、そこに亜麻色の髪が乗せられている。

「なのはが眠たいっていうから、ちょっとね」

フェイトの腕を枕にして、なのはは机に突っ伏すように眠っていた。

もう片方の手でなのはの髪を撫でながら、その寝顔を愛おしそうに眺めるフェイトに、アリサが大きな溜息をつく。「そんなおかしな格好で座ってるくらいなら、膝枕でもしてやればいいじゃない」

「そう言ったんだけどね、学校では恥ずかしいからってなのはが」

「全校生徒公認のカップルなのに、今さら恥ずかしいものもないでしょうが」

やれやれ、とあきれながら、アリサはフェイトの向かいの席に腰を下ろした。

「ところでフェイト、あんた最近、すずかのことどう思う？」

「え？ すずか？」

と、突然予想もしていなかった話題をふられて、フェイトが少し面食らったような顔になる。

「どう、ってすずかは大事な親友だよ」

「ああ、そういうことじゃなくて、最近すずかの様子、お

かしいと思わなかったこと」

アリサが言い直すと、フェイトは考え込むように首を傾げた。

「うーん……別に、いつもと変わらないと思うけどな」

ああ、やっぱりフェイトでもだめか、とアリサは頬杖をついた。

「さすががどうかしたの？」

フェイトがアリサの顔をのぞき込む。

「どうかした、ような気がするだけ、よ」

アリサが首を振る。はやてもフェイトも気付いていない、ということはやはり自分の気のせいなのだろうか。

手を伸ばして、なのはの頬をつついてみる。

「ん……」

なのはがくすぐったそうに身をよじるのを見ながら、アリサはなのはを起ささないように、そっと頬をつついたり軽く押したりを繰り返してみた。

「……ん、ふにゃあ……」

なのはの口から吐息が漏れる。

「まったく、幸せそうな顔して」

はあ、とアリサは天井を仰いだ。

「よくわからないけど、アリサはさすがが何かおかしいって思ってるのかな」

「そうね、あたしも、よくはわかってないんだけど」

どこがおかしいのか、具体的に説明できないもどかしさに、身もだえしそうになる。

と、フェイトがアリサの瞳を見て、それから小さく微笑んで言った。

「アリサがそう思うなら、きつとそうなんじゃないかな」

その言葉とフェイトの表情に、アリサの動きが止まる。

「さすがのことで、アリサが間違えるなんて有り得ないもの。私は気づけなかったけど、多分、アリサは正しいんだと思う」

ね、と笑うフェイトに、アリサは軽く自分の前髪を掴むと、

「あーあ」

と、悔しそうな声をあげながら立ち上がった。

「まさか、フェイトにそれを言われるとは思ってなかったわ」

「え、私、なにかおかしいこと言ったかな」

「ううん、珍しく良いこと言ったわよ、フェイト」

「め、珍しいの？」

「珍しいわね。いつもなのはのことしか言わないし」

「そんなことないと思うけどな」

「少し、認識を改めたほうがいいわね」

「そうかな？　なんだかアリサに言われるとそんな気がしてくるから不思議だよね」

「いい傾向だわ」

アリサは腕を伸ばして、そのすぐ脇でゆったりと寝息をたてているのはの顔を、中指で軽くはじいた。

「ふえっ！ な、なに？」

なのはが驚いて顔をあげる。

「ありがとね、フェイト。その寝ぼすけにもよろしく」

口を開け、呆然とした顔でアリサを見上げるなのはの頭を軽く撫でてから、アリサは足早に教室を出た。

「そうね、あたしとしたことが回りくどかったわ」

走り出す寸前程度の速さで廊下を進みながら、携帯の時計を確認する。

「すずかは今、委員会に出ているはずだ。そろそろ終わる時間のはずだが、急げば間に合うだろう。」

「気になるなら、直接すずかに聞けばいいのよね」

「はやてやフェイトに様子を尋ねてまわる、などというのは自分の流儀じゃない、とアリサは自分で自分の頭を軽く叩いた。」

余計なことは考えない。

わからないことがあるのなら、本人に聞いただけせばいい。

委員会室に繋がる廊下の角を曲がると、ちょうど部屋の扉が開いて、中からすずかが他の委員の子たちと一緒に出てくるところだった。

「すずか！」

「あれ、アリサちゃん？」

突然、名前を呼ばれて驚くすずかの手を取って、そのまま引つ張るようにして歩き出す。

「え、ど、どうしたの？」

戸惑うすずかの声に構わず、校舎の裏手へと向かうアリサ。

「アリサちゃんてば、ねえ、何か……あつたの？」

アリサに引かれるままについてくるすずかのその言葉に、アリサはまた微妙な違和感を覚えた。

「いったい何かあつたのか、という反応ではなく、まるで、何かがあることをあらかじめ予想していたような。」

いや。

何かがあることを、期待、していたかのような。

渡り廊下を抜けて、中庭に出る。

その一番奥、校舎の影で薄暗くなってしまう一角に置かれたベンチに腰を掛けて、アリサはすずかの身体を引き寄せた。

ほとんど抱きかかえるような体勢でのぞき込んでくるアリサに、すずかの頬がうつすらと朱くなる。

「ア、アリサちゃん、あの」

わずかに声を震わせるすずか。だがアリサはそんなすずかの照れくさそうな態度に構うことなく、鼻先が触れるのではないかというほどにすずかに顔を寄せて言った。

「すずか、何があったのか言ってみなさい」

アリサの言葉に、すずかの息が一瞬止まる。

「最近、態度がおかしいから。ここしばらくの間に何があったのか、一つ残らず話しなさい」

そのアリサの有無を言わせぬ断定的な口調に、思わずアリサから目を逸らそうとしたすずかだったが、

「すずか、ちゃんとあたしを見て」

アリサがすずかのあごに手をそえて自分に向き直らせると、観念したようにすずかは苦笑を浮かべた。

「アリサちゃんには、隠し事は出来ないね」

「てことは、やっぱりなにか隠し事があるってことね」

「うん。アリサちゃんを、巻き込みたく……なかつたから」

そう寂しそうに微笑むすずかに、アリサの心臓がまるで跳ねあがるかのように大きく脈打つ。

……あたしを巻き込みたくない？

それは、どういうこと？

「すずか。いったい、あんたは何をしているの？」

アリサがすずかの両肩を掴んで揺さぶる。

「ちょっと、すずか」

「言えないよ、言ったら、アリサちゃんに迷惑かけちゃう」

目を逸らしてうつむくすずかに、アリサは思わず声を張り上げた。

「すずか！」

そのまま肩を抱き寄せて、すずかの唇に自分の唇を重ねる。

「ん……っ！」

「……ん、すずか、なにを、他人事みたいなこと言ってるのよ」

すずかを抱きしめ、その耳元でアリサが諭すように言う。

「何があったかは知らないけど、お願いだから、あたしにだけは隠し事はしないで。どんなときでも、あたしはすずかの味方で、すずかのことで悔やんだり怨んだりなんて絶対にしないから」

「アリサ、ちゃん」

すずかが、アリサの背中に手を回して、同じようにアリサの身体を抱きしめる。

「ありがとう、アリサちゃん。本当のこと言うよね、私も、ちょっとつらかったんだ」

「そう。なら、ますます許せないわね。すずかをつらい目にあわせるなんて」

「ふふ、アリサちゃんは優しいね」

「なあに、今頃気付いたの？」

「ううん、ずっと前から、気付いてたよ」

すずかは顔を上げると、アリサの手を取って微笑んだ。

「アリサちゃん、今日、これから時間あるかな？」

「なくても作るわよ。すずかのためなら」